

〈付録 A〉各節のポイント

1. 英語は印欧祖語から派生したゲルマン語派に属する。英語の歴史は大きく古英語期、中英語期、近代英語期に分けられる。
2. 英語の表記に使われる文字は「アルファベット」「ラテン文字」「ローマ字」と呼ばれる。
3. アルファベットには 26 文字あり、各文字に大文字と小文字がある。
4. 26 文字は母音字と子音字に分類できる。
5. 各文字には名称と音価がある。
6. 英語では発音と文字・綴りととのずれを押さえる必要がある。
7. 子音字には 1 字で 1 音を表す単子音字と、複数で 1 音を表す複子音字がある。複子音字には同じ子音字を重ねた重子音字が含まれる。
8. 母音字には 1 字で 1 音を表す単母音字と、複数で 1 音を表す複母音字がある。複母音字には同じ母音字を重ねた重母音字が含まれる。
9. 母音字は強勢の有無 (強音節か弱音節か) で大きく発音が異なる。
10. 強音節では長音と短音の対立がある。
11. 強音節の複母音字は長音が基本である。
12. 強音節の単母音字には長音と短音がある。
13. 強音節の単母音字は、開音節では長音、閉音節では短音となる。
14. 重子音字の前の強音節の単母音字は閉音節のため短音となる。
15. 母音字で始まる接辞を付ける際、最後の音節が単母音字・短音で子音字 1 字が続く場合には、短音の音価を維持するため重子音字を用いる。
16. 綴りに含まれる、それ自身は発音されない文字を「黙字」と言う。黙字の母音字としては e が使われる。黙字 u は g, q の後ろに限られる。
17. 母音の代わりに子音 /l, m, n/ が核となる音節もある。音節の核となる子音を「音節主音的子音」と呼ぶ。
18. 綴り字上の音節は母音字を必要とし、発音上母音がない場合は綴りに黙字の e を挿入する。
19. 発音上、閉音節に長音の単母音字が現れる場合、見かけ上開音節にするため黙字の母音字 e を添える。この e は「マジック e」と呼ばれることがある。
20. 伝統的な内容語は 3 文字以上で綴るという規則に従い、文字数が足りない場合、黙字の e や重子音字を用い 3 文字にする。
21. c は前母音字 e, i, y の前では軟音 ċ /s/, それ以外では硬音 ċ /k/ が基本である。
22. ck, cq, cc, sc の発音も c の読み方に従い、その結果 ck /k/, cq /k/, cc /k/, ks /, sc /sk, s/ と読まれる。
23. g は前母音字 e, i, y の前では軟音 ġ /dʒ/, それ以外では硬音 ġ /g/ が基本である。
24. 接尾辞の先頭が前母音字である場合、語幹末の硬音 ċ, ġ /k, g/ が軟音 ċ, ġ /s, dʒ/ に変わることがある。
25. 外来語の c と g の発音と綴りの規則には英語とは異なるものがある。
26. イギリス英語の judgement をアメリカ英語で judgment と綴るのは、d を g の軟音標識とみなし、本来の軟音標識の黙字の e を余剰的で不要なものとしなすためである。
27. x には 3 つの音価 x /ks/, x /gz/, z /z/ がある。語頭では x /z/, 語末では x /ks/ だが、それ以外の位置ではある傾向があるのでそれを押さえておくといいが、例外も多いので単語ごとに覚える必要がある。
28. 同じ文字を重ねた重子音字と、異なる文字の連続だが重子音字と同じ働きをする「隠れ重子音字」がある。
29. 文字の名称も綴りと発音の規則に基づいている。
30. 語末の l, ll は規則に従い使い分けられる。
31. 語末の k, ck, c は規則に従い使い分けられる。
32. 語末の f, ff は規則に従い使い分けられる。
33. 語末の s(e), ss は規則に従い使い分けられる。
34. 語末の ch と tch, ge と dge は規則に従い使い分けられる。
35. 語末の単母音字の後の /t/ は tch と綴られ、t のない ch は /k/ と発音される。機能語の such, which などは例外的な綴りである。
36. i, u は語末では使えない。
37. i, u は母音字間では使えない。
38. v の後には母音字が来る。語中でも語末でも、v の後に母音がない場合は黙字の e を添える。
39. 後母音字・短音 a, o は l の前で長音 au, ōu の発音に変わることがある。
40. 後母音字・短音 a, o は w の後で短音 o, u に変わることがある。
41. 母音字 a, e, i, o, u には第 2 長音 /ɑ:, eɪ, i:, ɔ:, u:/ がある。
42. a の第 2 長音は ā /ɑ:/ である。
43. e の第 2 長音は ē /eɪ/ である。
44. i の第 2 長音は ī /i:/ である。
45. o の第 2 長音は ō /ɔ:/ である。
46. u の第 2 長音は ū /u:/ である。
47. o の発音には ō /oʊ/, ȯ /ɑɔ/, ȯ /ɔ:/, ȯ /ʌ/ などがある。
48. ラテン語由来の前置詞では第 2 長音が用いられることがある。

49. 同じく 2 字で長音を表しても、〈複母音字〉と〈単母音字 + 黙字 e〉は扱いが異なる。長音となる仕組みが異なり、複母音字の第 2 要素は黙字ではないため、-ing などの接辞が付く場合でも削除されない。
50. 強勢のない音節には強母音とは異なる弱母音が現れる。
51. 母音字の音価、綴りを考えるうえで強勢は重要なポイントで、同じ綴りでも強勢の有無により発音も変わる。
52. 開音節であれ閉音節であれ、弱音節では母音は弱母音となり、強音節で見られる母音の長短の対立がないか不明瞭で、母音字で始まる接辞を付ける時も綴り字上の音節構造の調整は不要で重子音字は用いられない。
53. 語末の ey は強勢があれば /eɪ/、なければ /i/ となる。
54. c, s, z, t, d は弱音節では /i, j/ の前で口蓋音化する (/ʃ, ʒ, tʃ, dʒ/)。後続母音も弱母音である場合、/i, ju, jʊ, jə/ は口蓋音化を引き起こしたあと脱落する(後続母音と 1 つになる)。
55. 語末の /dʒən, ʒən, ʃən/ の綴りには gion, sion, ssion, tion, shion などがある。先行単母音字の発音に注意する。
56. 無強勢の語末の /dʒən, dʒɪn/ の綴りには (d)gen, (d)geon, (d)gin, gion がある。dg は重子音字扱いで、先行単母音字に強勢があれば短音になる。
57. 黙字の子音字には、元々発音されていたものが脱落したのちも綴り字に残ったものに加え、後から(なかには誤解に基づく)語源に合わせ綴りに追加されたものもある。
58. 語頭の pn-, ps-, pt- はギリシャ語起源の語に見られる綴りで p は黙字。ch /k/, rh /r/ の h も黙字の一種とみなすことができる。ph, th は破裂音 p, t に対応する摩擦音で発音され、複子音字扱いとなる。
59. アルファベットは表音文字だが、発音が同じでも異なる綴りにより別の語であることを示したり、語の内部の構成がわかったりするなど、綴りのレベルでは表語性、表形態素性が見られる。
60. 動詞の過去形・過去分詞の接辞 /t, d, ɪd/ の綴りは ed が基本だが、何らかの点で不規則な部分を含む場合には t, d も使われる。
61. 語末の /s, z/ が語幹の一部か接辞(名詞の複数、動詞の 3 人称単数現在)かは、綴り字上前者であることを示す合図があるため判断できる。
62. 重子音字 ss で綴られる語末の /s/ は接辞ではなく語幹の一部である。
63. 接辞、黙字の e が続く s /s, z/ は語幹の一部である。
64. 基本的に i, u の後の語末の s は接辞ではなく語幹の一部である。
65. 語末の x /ks/ の /s/ は語幹の一部である。
66. ng の発音には ŋ /ŋg/, ŋ(e) /ndʒ/, ŋ /ŋ/ の 3 つがある。
67. ee, oo を除き、同じ母音字の連続 (aa, ii, uu, yy) は避けられる。語中形が i で終わる語 (e.g. lie, try) に -ing を付ける際は i の連続 (-iing) を避け -ying と綴る。y で終わる後に接辞 -y を付ける時には y の連続を避け -yey と綴る。
68. 接辞を付けてできる語の綴りも規則に従う。母音字で始まる接辞を付ける場合、語末の音節の母音が、i. 強勢を持ち、ii. 短音であり、iii. 1 字(単母音字)で綴られれば、語末の子音字を重ねる。
69. 接辞の付け方 1: 単母音字の後で重子音字を使用するかどうかは、語末の音節に強勢があるかないかに依存し、強勢がなければ子音字を重ねない。
70. 接辞の付け方 2: -at で終わる語は(機能語の at, that を除き)弱母音にはならず短音 -ăt /æt/ となるため、接辞付加の際には基本的に t を重ねる。
71. 接辞の付け方 3: -l で終わる語は、アメリカ英語では他の子音字と同様規則に従い l, ll が用いられるが、イギリス英語では最後の音節に強勢がない場合も重子音字 ll が用いられる。
72. 接辞の付け方 4: 複母音字は音節構造にかかわらずそれ自体で長音を表すため、音節構造の調整は不要である。
73. 接辞の付け方 5: 複子音字(重子音字を含む)では重子音字化は行われないため、単母音字+複子音字で終わる語では、そのまま接辞を付ける。
74. 接辞の付け方 6: 接辞 -ance, -ence, -able, -ible が付加された派生語では強勢の位置が変わることがある。重子音字の使用は派生語の強勢の位置による。
75. 接辞の付け方 7: 名詞に付いて形容詞を作る接辞 -ed の場合も、重子音字の使用は規則に従う。
76. 接辞の付け方 8: -ie, -y で終わる語では、語中形の -i に接辞が付いた形になるが (e.g. lie-lies, try-tried), -ing の場合は i の連続 (ii) を避けるため、-iing ではなく -ying が用いられる (e.g. lying, trying)。
77. 接辞の付け方 9: -o で終わる語の場合、-(e)s は -oes の場合も -os の場合もある。ある程度の傾向はあるが絶対ではないので、1 つ 1 つ覚える必要がある。
78. -ic で終わる語は -ic の前の音節に強勢が来て母音字は短音となることがあるが、そうならないものもあるので単語ごとに確認して覚える必要がある。-aic, -oic のように -ic の前が母音字の場合は開音節なので必ず長音となる。
79. 黙字の e には様々な用法がある。マジック e だけが黙字の e (サイレント e) ではない。黙字の e の働きを理解するには、e がなかったらどうなるか考えてみるとよい。
80. 現代英語の綴りは特定の個人、組織が定めたものではなく明示化された規則はないが、英語の話者は英単語の発音と綴りに接することでパターンを無意識のうちに習得し使用している。